

異文化対応力養って

神大で
シンポ 観光先進国向け議論も

外国人旅行者が増加する中、文化が異なる人々を地域に迎えるために何が必要かを考えるシンポジウムが14日、横浜市神奈川区の神奈川大学で開かれた。「観光分野における異文化理解と心のバリアフリー」を主題に講演やパネルディスカッションを実施。柔軟に違いを理解し、多様性を尊重する「心のバリアフリー」の大切さを確認した。県と同大の主催で、約100人が参加した。（柏尾 安希子）

外国人旅行者数は右肩上がり、特に今年は東京五輪・パラリンピックに向けて一層の増加が予想されている。一方で、文化が異なる旅行者が増えることでマナーやルールの違いによる摩擦も生まれているのが実情だという。このため、より観光地としての魅力を高めるために、何が必要かを考えようと企画された。

同大外国語学部の鈴木幸子准教授は「持続可能な日

本の国際観光のために多様性を理解する」と銘打ち基調講演した。鈴木准教授は、2003年に「観光立国」を宣言した日本への外国人旅行者数は、増加基調だと紹介。13年度には年間1千万人、18年度には3千万人を突破し、「観光後進国」といわれてきたが、最近では先進国と認められつつある」とした。

一方で鈴木准教授は、ルールとしての社会的な禁止

事項が多く、交流を避けがちな日本人も少なくないことから、外国人旅行者が「日本で歓迎されていない」と感じるケースが多いと報告。その上で「考えねばならないのは、異文化対応力の養成。（日本の）文化をきちんと誤解のないように伝えるられる知識が一般の人たちにも求められるので」とした。

パネルディ

多様性の理解について基調講演する鈴木准教授
＝横浜市神奈川区



スカッションは、観光業界の第一線で活躍するパネリストが外国人をもてなす現場の実態を報告。日本観光通訳協会の萩村昌代会長は「外国人旅行者の文化に無いものも説明して理解いただいている。異文化をむしろ楽しみたい」と心構えを話した。また、富士箱根ゲストハウスの高橋正美代表は「異文化を体験して失敗し、試行錯誤を繰り返すことで発想を転換する以外に心のバリアフリーを身に付けることは難しい」と話していた。